

『南詞雑解』のゲズ・イゲ小考

川口敦子

一 はじめに

植物のカラタチ（枳殻、枸橼）を意味するゲズという語について、川口（二〇一）において、キリシタン資料の「パレット写本」（一九一一年写）所収福音書にラテン語 *Indis* の訳語としてゲズが使われているが、それは『日本国語大辞典』第二版のいう「植物『からたち（枸橼）の古名』ではなく、カラタチの九州方言であつた可能性が高いということ述べた。

その後、岸本恵実氏より、ゲズについては土井忠生氏が『南詞雑解』についての論考（土井一九八二）で触れているとのご教示をいただいた。

『南詞雑解』（『南詞集解』⁽¹⁾）は、江戸時代中後期の長崎の東京（トシキン）通事魏五左衛門が寛政年間に筆写したと推定される三冊の写本で（土井一九八二a・三六七―三六八）、漢字表記ないし漢字片仮名交じり表記の語彙に、右訓として片仮名表記のポルトガル語、左訓として片仮名表記の日本語訳を付した対訳辞書である。かつては長崎県立図書館の所蔵（渡辺文庫）であつたが、

現在は長崎歴史文化博物館の所蔵となつている（所蔵番号・奥書へ「9」〜⁽²⁾）。現存するのはこの写本のみで、原本の成立年代は不詳である。

『南詞雑解』第一冊の「木」部のうち「罌子」⁽³⁾に、右訓としてポルトガル語「ドルミテイラ」(*domiteira*、ドルミテイラ)、その日本語訳として左訓「ゲズ」があてられている。また直後に同じく「ドルミテイラ」を右訓に持つ語「根椿」を挙げ、その日本語訳として左訓「イゲ」があてられている。

一 罌子^{ドルミテイラ} 一 根椿^{同ドルミテイラ}
ゲズ^ド スコト^ス イゲ^イ ノ指スコト^{アヒヤン}

この箇所にはいくつかの問題があり、それについて土井氏は次のように述べている。⁽⁴⁾

罌子^{ゲズ}、根椿^{イゲ}、イゲノ指スコト（一）

右の初めの二語にはポルトガル語のドルミテイラ (*domiteira*) があててあつて、最初の漢字の通り、ケシを意味する。ゲズは今日の九州方言などで枳殻を意味している。草の罌粟

と木の枳殻とは共に刺があつて、薬用に供せられる点で共通しているけれども、ことばとしてのケシとゲズが通用したかどうかは不明である。根椿の文字面が意味するところはわからない。これにあてられた日本語のイゲは、『日葡辞書』に棘を「上」(近畿)でイギ、「下」(九州)でイゲと言うと説いてある。原本から転写の際に誤りを犯さなかつたとすれば、厳密さを欠く用語が、長崎通事の仲間か、庶民の間かで行われていたと推測せざるを得ない。

(土井一九八二b:三九七-三九八)

ポルトガル語 *dormideira* はケシ(罌粟)を意味する。「罌子」もケシを意味するので、「ドルミテイラ」と「罌子」は対訳として適切である。一方、日本語訳の「ゲズ」は、土井氏が述べるようにカラタチの九州方言であつて、ケシではない。『日本方言大辞典』の「げず」の項目にも、「からたち(枳殻)」「こうじ(柑子)」「ゆず(柚)」「くすぞいげ(柞木)」は挙げられているが、ケシは挙げられていない。したがつて、「ドルミテイラ」と「ゲズ」は、「罌子」を仲介した対訳としては結びつかない。

また、「罌子」の次の掲載語「根椿」にも同じく「ドルミテイラ」があてられているが、まず「根椿」の意味が不明であり、*dormideira* の対訳として適切であるかどうかかわからない。「根椿」の意味が不明であるために、日本語訳の「イゲ」との関係もわからないのである。

本稿では、キリシタンの辞書類からポルトガル語 *dormideira*

とゲズ・イゲの関係を考察し、『南詞雑解』の「根椿」とその左訓「イゲ」の意味について明らかにする。

二 dormideira とゲズ・イゲ

キリシタンの辞書類にはゲズの語が見当たらないので、*dormideira* とゲズの直接の関係はわからない。そこで、まず、キリシタンの辞書類におけるポルトガル語 *dormideira* の日本語訳を確認する。

『羅葡日対訳辞書』(一九五五年、天草刊)ではラテン語 *Papauer* の対訳としてポルトガル語 *Dormideiras* (*dormideira* の複数形) と日本語 *Qexi* (ケシ) を挙げ¹⁸⁾。

Papauer, eris, Lus. Dormideiras, Jap. Qexi.

(『羅葡日対訳辞書』p. 544)

『葡日辞書』(一七一八世紀成立)では *Dormideiras* を *qexi* (ケシ) と訳すほか、*Papoulas* も *qexi* と訳して¹⁹⁾。

Dormideiras, qexi. (『葡日辞書』12r-b15)

Papoulas, qexi. (『葡日辞書』61v-b12)

『日葡辞書』(一六〇三-一〇四年、長崎刊)では、日本語の見出し語 *Qexi* にポルトガル語 *Dormideiras* の訳をあげ²⁰⁾。

Qexi. Dormideiras. (『日葡辞書』193v)

このように、キリシタンの辞書類ではポルトガル語 *dormideira(s)* に対応する日本語はケシである。「罌子」に日本

語訳として付されているゲズ、そしてゲズの中央語であるカラ
タチはその訳語に見当たらない。また、「根椿」に日本語訳と
して付されているイゲもその訳語に挙げられていない。

それでは、日本語イゲは、キリシタンの辞書類ではどのよう
なポルトガル語の訳語とされているだろうか。

『日葡辞書』⁽⁵⁾ではイゲ (Ige) を見出し語として立てており、
土井氏が述べるように、Cami (上) ではイギ (Igui) の形を取る
ことが書かれている。

Ige. *Espinha. No cami se diz. Igui.*

(『日葡辞書』130v)

Ige. イゲ (いげ) 棘・上 (Cami) では Igui (いぎ) と言ふ。

(土井他編訳一九八〇:三三三)

なお、『日葡辞書』補遺編には同じ語形 Ige と「*Nele, ou
arroz com casca.* (粃 すなわち、穀皮のついた米)」と訳す語も挙
げられており、これもシモ、すなわち九州の方言であつて、婦
人語であるとする(『日葡辞書』36v、土井他編訳一九八〇:三三三)。
『日本方言大辞典』の「いげ」の項によれば、方言としての
イゲは九州以外の地方にも例があるが、九州方言としてのイゲ
は、「とげ」「栗のいが」「魚の小骨」「針」「粃のついた米」「と
げのある植物。いばら(茨)」「のいばら(野茨)」「ばら(薔薇)
の意味が挙げられている。

『葡日辞書』では *Espinha* の項目にイゲの語が見える。

Espinha fone. Espinha de peixe. Luono fone. Ige.

(『葡日辞書』20r-415-16)

イゲは *Espinha de peixe* (魚の骨) の対訳「魚の骨。いげ。」
として挙げられている。見出し語 *Espinha* の訳語が *fone* (骨)
であるから、このイゲは、直前の「魚の骨」の「骨」の部分の
言い換えではなく、「魚の骨」全体の言い換えであると考えら
れる。

また、動詞 *Espinhar* の対訳にもイゲの語が見える。

Espinhar. Igueno sasu. fonega sasu.

(『葡日辞書』20r-417)

ここでは「いげの刺す。骨が刺す。」とあつて、イゲの言い換
えが「骨」であることがわかる。なお、ポルトガル語 *espinha*
(骨) は、*espinho* (とげ) とは別語である。

『南詞雑解』のイゲは「木」部にあるので、「骨」ではなく、
「とげ」「とげのある植物」のほうの意味であろう。

「とげ」を意味する *espinho* の語は、『日葡辞書』では「荊棘
(けいぎょく)」の訳語としても用例がある。

Qeigiocu. Ibara. caratchi. Espinhos, ou tojos.

(『日葡辞書』190r)

*Qeigiocu. ケイキョク (荊棘) Ibara. caratchi. (いばら) から
たち) いばら、または、とげのある植物*^{※1}

※1 原文の *tojos* は、はりえにしだをさす。

(土井他編訳一九八〇:四八二)

『日葡辞書』では、見出し語「荆棘」の言い換えとしてイバラとカラタチを挙げ、その対訳に *espinhos* (*espinho* の複数形) と *tojos* をあてる。訳語「*Espinhos, ou tojos*」が、「荆棘」単独に対するものなのか、見出し語とその言い換えである「荆棘・イバラ・カラタチ」全体に対するものなのか、それとも言い換えの「イバラ・カラタチ」二語とそれぞれ一対一の対訳関係にあるのかは、この記述だけでは判断できないが、荆棘とイバラ・カラタチが併記されているのは、これらの語が類義語のような関係にあると認識されていたからであろう。そしてそれらの訳語の一つとして *espinhos* があてられているということは、*espinhos* とカラタチは直接的ないし間接的に対訳関係にあると解釈することができる。そして、カラタチの九州方言がゲズである。

以上の内容を整理すると、イゲとゲズは次のような関係にあると示すことができる。

イゲ ≡ *espinhos* ≡ 荆棘 ≠ カラタチ ≡ ゲズ

ここから、『南詞雑解』で「ドルミテイラ」(*dormiteira*) と対訳関係にあると思われる、「ゲズ」(墨子)と「イゲ」(根樁)の間に繋がりを見出すことができる。ただし、ポルトガル語 *dormiteira* と「ゲズ」「イゲ」との間に、訳語として直接の繋がりがあるとは言えない。

なお、『日葡辞書』の「イゲ」の項目には *espinho* のポルトガル語訳があるが、土井氏はこれを「棘」として、イゲを「とげ」

の意味で解釈していると思われる(土井一九八二b:三九七―三九八)。一方で、『日葡辞書』の「荆棘」の項目での *espinhos* は、「とげ」ではなく、イバラ・カラタチという「とげのある植物」の意味を含むと考えられる。九州方言のイゲには「とげ」の他に「とげのある植物」の意味もあることを踏まえると、『日葡辞書』のイゲも「とげのある植物」の意味で使われているという可能性はないだろうか。

前述のようにイゲとカラタチ・ゲズが *espinhos* を介して繋がるとすれば、イゲもまたカラタチ・ゲズのような「とげのある植物」を意味する可能性は高い。そしてそれは『南詞雑解』のイゲについても同じことが言えるのではないか。

三 「根樁」とは何か

土井氏が「根樁」の文字面が意味するところはわからない(土井一九八二b:三九七)と述べるように、「根樁」の表記で示されるものが何であるかは不明である。

「木」部に挙げられている語彙であるからには、何らかの植物であろうと推測される。右訓の「ドルミテイラ」から考えれば、まずケシと関係がありそうに思われるが、どうもよくわからない。仮に左訓「イゲ」が長崎方言であるとして、その意味は「とげ」なのか「とげのある植物」なのか。直後の「イゲの指スコト」という語句のイゲについて、単純に考えれば「とげ」

の意味のようにも思われるが、これを「とげのある植物」と解釈しても意味は通じるであろう。左訓「イゲ」を「とげのある植物」の何かであると解釈すれば、少なくとも右訓「ドルミテイラ」との繋がりは見いだせる。そして、「根椿」も「とげのある植物」の何かであると仮定すれば、その正体も明らかになるのではないか。

『日本方言大辞典』の「いげ」の項目では、植物を意味するイゲのうち、特に長崎方言として「のいばら(野茨)」「ばら(薔薇)」の意味が挙げられている。このことを踏まえて考えると、「根椿(イゲ)」は、ノイバラやバラの類という可能性はないだろうか。

この仮説を基に考察した結果、「根椿」は「長春」ではないか、という結論に至った。

「根椿」は、元は「長春」と書かれていたものに、後から木偏を追加したものだと考えられるのである。

原本の該当箇所をよく観察してみると、「根」も「椿」も、その前後に書かれている他の文字に比べて木偏と隣のバランスが悪い。他の木偏の文字は偏と隣の線がほとんど重なることなく、間隔も詰まっていない。ところがこの「根」「椿」の二文字は、木偏自体の幅が狭く、さらに木偏の線の一部が右側の旁に重なっている。一方、「旁」に相当する「長」「春」の部分の文字幅は、それだけで一文字分に相当するほどに大きく書かれている。一見するとわかりにくいですが、どうやら、元々は「長

春」と書いてあったところに、後からそれぞれの文字に木偏を書き足して「根椿」としたのではないかと思われるのである。偏と隣のバランスが悪いのは、後から無理に木偏を継ぎ足したせいだろう。木偏を追加したのが本文の筆写とほぼ同時であったのか、それとも後世のものであるのかは、墨色や筆跡からは判断しがたいが、少なくとも最初は「根椿」ではなく「長春」と書かれていたはずである。

では、「長春」とは何か。

貝原益軒『大和本草』(二七〇八年成立、一七〇九年刊)によれば、「月季花」の別名を「長春」というのである。

月季花 イハラノ類ナリ毎月光開ク俗ニ長春ト云春花尤ヨシ八重ノ紅花ナリ又月月紅ト云

(『大和本草』卷之七、一六オ。傍線は引用者による)

「月季花」とはコウシンバラ(庚申薔薇)のことである。『日本国語大辞典』第二版では、「げつきか(月季花)」および「ちようしゅん(長春)」の項目に、それぞれ「植物『こうしんばら(庚申薔薇)』の漢名。」との説明がある。なお、植物の「長春」の初出として饅頭屋本節用集の用例が挙げられており、この語が室町末期には存在していたことがわかる。また、「こうしんばら」の項目には、コウシンバラは中国原産のバラ科の常緑低木で、「月季花」と「長春」はその漢名とある。

前述したように「イゲ」がバラを意味する長崎方言であると解釈し、そして「根椿」が実は「長春」、すなわちコウシンバ

ラのことであるならば、バラ科の植物「長春(根樅)」に、バラを意味する方言「イゲ」という日本語訳が与えられるのも不思議ではない、ということになる。

「長春」に木偏を足して「根樅」とした人物は、「長春」が植物の名であることがわからなかったのだろう。「長春」では意味が通らないからこれは誤字に違いないと考えて、本来は不要な「木偏を追加する」ということをしてしまったのではないか。

また、『大和本草』には月季花(コウシンバラ)の花について「八重ノ紅花ナリ」とあることから、ケシの花との類似性も推測できる。ケシ、すなわち「ドルミテイラ」とコウシンバラには花の色や形などの類似性があつて、そこから同種とみなされた可能性もある。ただし、*dormideira* (ケシ)とコウシンバラは異なる植物であり、「ドルミテイラ」と「長春/イゲ」が、語の意味として直接繋がるということではない。

四 おわりに

以上の考察を整理すると、以下のようになる。

- ・「根樅」は、本来は「長春」とあるべきもので、コウシンバラのことである。
- ・「罌子」(「ケシ」)は、右訓「ドルミテイラ」(*dormideira*)、ケシと意味が通じるが、左訓「ゲズ」(カラタチの長崎方言)とは意味が一致しない。

・「長春(根樅)」(「コウシンバラ」)は、右訓「ドルミテイラ」とは意味が一致しないが、左訓「イゲ」(バラの長崎方言)と意味が通じる。

・「ドルミテイラ」「罌子」「ゲズ」「長春」「イゲ」は、「とげのある植物」という括りで共通する。

土井氏は「原本から転写の際に誤りを犯さなかったとすれば、厳密さを欠く用語が、長崎通事の仲間か、庶民の間かで行われていたと推測せざるを得ない。」(土井一九八二b:三九八)と述べるが、「根樅」が「長春」の誤りであると考えられる以上、「誤りを犯さなかったとすれば」という前提は揺らぐだろう。「根樅」という表記は、写し間違いというよりも蛇足のようなものだが、元々そこに書かれていた「長春」の意味を理解していなかったからこそ生じたものであり、何らかの誤解が生じやすい環境にあったとも言える。「罌子」と「長春(根樅)」に付されたポルトガル語・日本語の意味が一致しないのも、何らかの誤記や誤写、あるいは誤解による可能性が否定できない。

なお、原本からの誤写がなかったとしても、土井氏の言う「厳密さを欠く用語」のあり方はゲズとイゲで異なる。「罌子」の左訓「ゲズ」がカラタチ限定ではなく広く「とげのある植物」の意味で使われているとしても、ケシと特定できない語であるという点において、土井氏の言うように「厳密さを欠く用語」であろう。一方、「長春」の左訓「イゲ」はコウシンバラを意

味する用語としては妥当と言えるが、右訓「ドルミテイラ」との関係においては「厳密さを欠く用語」ということになる。前者は漢語と日本語（長崎方言）との間の齟齬、後者はポルトガル語と漢語の間の齟齬、ということになる。

これらの「齟齬」が、土井氏の言うように長崎通事あるいは庶民という位相によるものなのか、それとも『南詞雑解』の編纂者ないし筆写者による収録語彙（対訳を含む）への理解度の問題によるものなのか、今後検討が必要であろう。

【付記】

『南詞雑解』の閲覧と撮影を御許可くださった長崎歴史文化博物館に、末尾ながら御礼申し上げます。

本稿はJSPS科研費J19K00643による成果である。

【使用テキスト】

貝原益軒（二七〇九）『大和本草』巻七。国立国会図書館デジタルコレクション
> <https://dl.ndl.go.jp/pid/2557469>

日本雅幸解題（二〇一二）『キリシタン版 日葡辞書 カラー影印版』、勉誠出版。

土井忠生・森田武・長南美編訳（一九八〇）『邦訳日葡辞書』、岩波書店。

金沢大学法文学部国文学研究室編（二〇〇五）『ラホ日辞辞典の日本語 本 文篇・索引篇』、勉誠出版。

岸本恵実解説・三橋健書誌解題（二〇一七）『フランス学士院本 羅葡日対訳辞書』、清文堂出版。

京都大学文学部国語学国文学研究室編（一九九九）『ヴァチカン図書館蔵 葡日辞書』、臨川書店。

中田祝夫（一九七九）『改訂新版 古本節用集六種並びに総合索引』、勉誠社。
『南詞雑解』、長崎歴史文化博物館所蔵本。筆者撮影の画像を使用（二〇二三年二月二日撮影）。

【文献一覽】

川口敦子（二〇一一）「キリシタン資料のゲズとその方言性」、『人文論叢…

三重大学人文学部文化学科研究紀要』二八、六一―七二頁。

尚学図書編（一九八九）『日本方言大辞典』、小学館。

土井忠生（一九八二a）「長崎通事のポルトガル語について」、『吉利支丹論 攷』、三六七―三九九頁。

土井忠生（一九八二b）『南詞雑解』と日本語、『吉利支丹論攷』、三八〇―三九八頁。

日本国語大辞典第二版編集委員会編（二〇〇〇―二〇〇二）『日本国語大辞典』第二版、小学館。

注

(一) 『南詞』に続く文字について、土井氏は「本書の漢字には異体字宛字誤字が多く、外題の雑の字は言偏に集の旁で書かれている」（土井一九八二a:三六七）として、この字を「雑」とする。「言偏十集」の表記をしない（できない）場合、『南詞雑解』または『南詞集解』の表記が用いられている。なお、長崎歴史文化博物館公式サイトの「資料検索」(<http://www.mnhc.jp/search.html>)では、資料名が「南詞【ザツ】解」で登録されているため「南詞雑解」「南詞集解」の表記では検索できない。本稿では、所蔵館がこの字を「ザツ」と登録していることに倣って、

『南詞雑解』の表記を用いることとする。

- (二) 「罌子」の「罌」の字は、下の部分が「缶」ではなく、「缶」の形である。
- (三) 本資料には鉛筆書きで算用数字による丁数の書き入れがあるが、表見返しに「1」、遊び紙に「2」、本文が始まる丁の表に「3」（以下同様）とある。本稿ではこの丁付けを踏まえて、鉛筆書きで「27」とある丁の表を二七丁表として示すが、実質的な本文としては二五丁表に相当する。
- (四) *dornideira* の検索のために、豊島正之氏によるデータベース「Latin Glossaries with vernacular sources 対訳ラテン語語彙集」<https://joa-roiz.jp/LGR/search> を利用した。
- (五) 原文の引用と併せて、日本語訳として土井他編訳（一九八〇）を引用する。
- (六) ただし饅頭屋本節用集には「長春」の語があるのみで、どの植物を指すのかは不明。

「かわぐち あつこ 本学教員」